



2006.12.01
No.333
(11・12月号)

福竜丸だより

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 ㊦136-0081 第五福竜丸展示館内
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

〈メッセージ・ボードに平和への願い〉

九月二三日の久保山忌より、展示館受付の横にメッセージ・ボードを設置しました。黒田征太郎さんの描いたピカドンカードにたくさんの方々が平和への願いを書き込んでいます。



来館者の感想文から

核実験ノー

核兵器はなくしてほしい

秋は、修学旅行や社会科見学、また一般の見学者も多い季節です。そんな折に以前から危惧されていた北朝鮮による核実験の実施が発表（一〇月九日）されました。来館者の感想にも核実験ノー、核廃絶への願いを読み取ることが出来ます。

核兵器を作り出し、使うのも人ならば、それをなくすのも多くの人がこの力で見れば、アメリカでもイラクから手を引くべきだという市民の声が高まっている。日本は平和憲法で世界に働きかけを強めなければと考えます（静岡・59歳男）。

北朝鮮もひどい実験を実行してしまいました。不安がいっぱいです。平和のために何が出来るか考えさせられた一日です（埼玉・51歳女）。

いま原爆を保有している国、開発しようとしている国の上層部に一度みてほしい。原爆を持ったとしてもその国の人は幸せになれない（東京・26歳女）。

核の拡散はぜったいに許して

はいけないと思う（東京・56歳女）。

北朝鮮のことがニュースで流れています。ほくは全国のみんがながよくなり核兵器なんかすててしまえばいいと思います（三重・小6男）。

実際の第五福竜丸を見てリアリティを感じた。水爆実験の地球への影響や被害を具体的に知ることができ、とても意味ある展示館だと思った。世界は確実に核保有化にすすもうとしている。平和を失いつつある。だからこそ被爆国日本が反核を訴えることはとても大切なことだと改めて感じた（大阪・20歳男）。

北朝鮮が核実験をおこない、日本でも核武装という流れが（2めん下へつづく）

寄稿 北朝鮮が核実験と聞いて

大石又七

北朝鮮は、核兵器を持たないほうがいいと思います。でない、その核兵器で国民が大勢殺されます。核兵器は戦争するためのものです。

このことは核兵器を持つてい、すべての国に言いたいと思います。持てば安心ではなく危険になるのです。

六〇年前、アメリカは原子爆弾を開発し、広島・長崎に投下して老人も子どもも無差別大量殺人を行いました。そして、世界の覇者として有頂天になりました。それで安心と平和が得られたでしょうか。NOです。

恐れを抱いた世界各国は、競って核兵器を持つようになり、ますます危険は増大しています。アメリカ軍が、五二年前に行った広島型原爆の一〇〇〇倍という水爆実験で、日本の一〇〇〇隻に及ぶ漁船や船舶が被爆し、私たち第五福竜丸乗組員も同じように被爆してこれまでも半数が命を失い、残った者も今なお発病で苦しんでいます。人間だけではありません。マ

ーシャル諸島での六七回の大気圏核実験は地球上あらゆる生物に、何千何万カウントという危険な放射能を撒き散らし、汚染と被害を与えました。

そのとき、こともあろうに一番被害を受けた日本政府は、アメリカのこの核実験に反対ではなく「賛成のうえに、協力する」と言ったのです。そして三二〇〇万人におよぶ国民の反対署名、世論を握りつぶしました。

その結果、どうなったでしょう。地球上の人類を何十回も殺せる、三万発の核弾頭が実戦配備され、人類はおびえて暮らすようになりました。

*
今、隣国の北朝鮮が核兵器を持つとうとしています。日本列島いたるところにあるアメリカ軍基地を狙っています。今、日本は世界で一番危険な国になりました。

被爆以来、半世紀も反対しつづけてきた私の頭のどこかで、「そらみたことか」という言葉

が渦巻いています。

私は、固定観念で固まっている大人にはなく、頭のやわらかい子どもたちに「核兵器と戦争をなくそう」と、学校へ行って次のように話しつづけています。

——世界につながったインターネットを使って、若者たちが手をつなぎあい、ゆがんでしまったこれまでの常識を変え、新しい世界を作ろう。テロが生れてこないようにするためにも、富の配分も行い世界を大きく進化させよう。

それぞれの国には警察と災害救助隊があれば十分です。そして国連に世界を統一する政府を作り、強力な防衛軍が地球を一括して守ればいい。

このようなシステムを作り出す人にこそ、ノーベル平和賞を与えたい。時間はかかるかもしれない、困難な道のりかもしれない。しかし、これこそが「人類が求めなければならぬ究極の目標」だと思えます。

*
かつて日本は強力な軍隊で大日本帝国を作り、世界を相手に戦争しました。そして二〇〇〇万にも及ぶ近隣諸国の人々を殺してきました。だが戦争には敗れ、無条件降伏で命だ

けは助けられました。

そして廃墟の中からその教訓を生かし、戦力を保持しない、軍隊を持たないと平和を誓って経済大国を築くことが出来ました。世界にも大きく貢献してきました。戦争は人を殺すことなのです。欲張りの野蠻人が持つ思想です。恨みだけを生みだし、何の益も生れてきません。

争いの絶えない世界も今、軍隊と核兵器、そして戦争をなくすときがきていると思います。軍隊や戦争が浪費する超膨大な資金（世界の軍事費、年間約一兆ドル）を貧困や教育、友好に使えば世界は変わります。変えなければいけないのです。そんなことができるわけがないと言つて悪化の一途を黙認し、恐ろしい核兵器などに巻き込まれて自滅するか、目覚めるかは指導者ではありません。私たちなのです。

かつて、テロの暗殺に倒れたアメリカのキング牧師もいつています。「本当の悲劇は、独裁者の暴虐ではなく、善良な人々の沈黙だ」と。
二〇〇六年一月二〇日記（おおいしまたち／ピキニ水爆実験被爆者、第五福竜丸乗組員）

（下めんからつづく）

表面化し、一方で第五福竜丸の悲惨な記憶がうすれてきているのではないのでしょうか。「第五福竜丸は生きています」新藤兼人監督の言葉を噛み締めたと思います（神奈川・20歳男）。

・核兵器は人類絶滅兵器です。武器として使おうという発想事態が間違っています。最後の一発を処分させるその日まで原水爆禁止運動に奮闘しましょう（福岡・29歳男）。

・核の装備を平気という人（政治家）は即刻辞めさせるべきです。一市民として来訪し痛みを肌で感じました（福島・69歳女）。

・第五福竜丸が棄てられようとしたことを初めて知りました。保存の声をあげた方がたは本当に素晴らしい。展示を見ていて何度も涙がこぼれそうになりました（東京・29歳女）。

・胸が痛みます。核兵器は不拡散でなく地上からなくすべきです。海の男たちの無念さが第五福竜丸の甲板に宿っているように思いました（千葉・57歳女）。

石に刻む線に平和の願い ベン・シャーン展より

今秋、二カ月にわたり開催された「ベン・シャーンの第五福竜丸と絵本展」が多くの来館者を迎え、大好評のうちに終了しました。

アーサー・ビナード
記念講演会

一〇月七日、詩人のアーサー・ビナードさんの講演には一〇〇人を超える人が集まりました。



講演するアーサー・ビナードさん

ビナードさんは、「ベン・シャーンは第五福竜丸事件のもつ叙事的な物語を描くと同時に、戦後アメリカが歩ん

できた歴史の中で、民主主義が衰退していくことへ危機感を抱き、スケールの大きな批判的な愛国心で表現した」との解釈を披露しました。そして演劇評論家アトキンソンの言葉やマノイ、ギンズバーグの詩を紹介しながら、事態を「小さくして忘れさせてしまおう」ともくろむ力に対して、ベン・シャーンらは「大きく広げて本質を表現し、不条理をあぶり出した」と解説しました。

核はなくすしかない

またあるときインタビューで「核兵器はなくせますか？」と聞かれ、あまりにも悠長な質問だと感じ、腹がたったそうです。第五福竜丸の二三名が生きて帰ってきたからこそ、これまでの五二年間「核

の冬」のおとずれをしのいできたが、私たちには核をなくす以外の選択肢はない、破綻するまで無責任に待っていたら全人類は終わってしまった、というビナードさんの小気味好い核兵器批判に会場は何度も笑いに包まれ、共感の拍手がおくられました。

サイン会に続き、展示館外庭でボランティアの手作りによるレセプションが開かれ、和やかに懇親しました。

多数のメディアで紹介

展示会は朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、東京新聞、中国新聞をはじめしんぶん赤旗、新婦人新聞やNHK「日曜美術館」などで報じられ、全国からの問合せが相次ぎ、静岡、大阪、京都、鹿児島など遠方から足を運んだ方もいました。

また「芸術新潮」「美術の窓」「イラストレーション」など美術雑誌にもアーサー・ビナードさんが構成し文を添えた絵本『ここが家だ』ベン・シャーンの第五福竜丸』（集英社）が紹介されたこともあり、会期中途切れることなく来館

者がありました。

アンケートへの感想から

◇テレビの紹介で初めて訪れました。私は昭和二九年、第五福竜丸事件のあとに生まれました。あれから五二年、憲法九条や教育基本法が変えられようとし、不安でいっぱいです。平和を守るために何ができるか考えさせられた一日です。

◇ベン・シャーンの絵のことを新聞で知り、来ました。忘れそうになりつつも時折訪れて、この事実を風化させてはならないと思つた。

◇ベン・シャーンの絵本を見てここに来ました。展示し続けるのは大変と思いますが必要な施設です。

◇一〇年前に来たときもベン・シャーンの絵が展示してありました。今回の絵本も並べてみるといろいろ考えさせられるものがあります。「久保山さんのことをわすれないと、ひとびとはいった。けれどわすれるのをじっとまっとうするひとたちもいる」という言葉が胸にひびきました。どうすればいいのかもっと考え

てみたい。

◇この悲惨な事実を「忘れさせたい」人たちが今、核武装を叫んでいる日本、断じて許せません。もう一度たくさんの若い人にここに足を運んでもらうようにしなければと決意をあらたにしました。

◇絵本の展示に感動しました。新鮮な角度が感じられ、第五福竜丸をめぐる問題がいっそう深く理解できる思いでした。

この物語が忘れられるのを、待っている人たちがいる。

ここが家だ ベン・シャーンの 第五福竜丸

絵＝ベン・シャーン 構成と文＝アーサー・ビナード

装丁＝和田誠 B5版カラー ●1,680円(税込)

水爆実験に遭遇した第五福竜丸をテーマに、人類が生き残るための叙事詩を描いた絵本。

集英社

【紹介】大石又七さんのインタビュー（朝日新聞・大阪本社版より）

2006年(平成18年)11月17日 金曜日 享月 日 薬行 月 日 (夕刊)

第五福竜丸事件 1954年3月1日、太平洋のビキニ環礁で、米国は水爆実験を実施。危険水域近くでマグロ漁をしていた静岡県焼津港所属の漁船第五福竜丸が被曝し、乗組員23人全員が放射性物質を含む灰（死の灰）をかぶった。同年9月には同船無線長だった久保山愛吉さんが急性放射能症で死亡。原水爆禁止運動が広がる契機になった。

元第五福竜丸乗組員・大石又七さんに聞く

1954年3月、太平洋ビキニ環礁近くで操業中の日本のマグロ漁船が、米国の水爆実験で被災し、半年後に乗組員1人が急性放射能症で亡くなった第五福竜丸事件。半世紀が過ぎ、乗組員23人のうち12人が肝臓がんなどで亡くなったが、核廃絶を願って体験を小中学生らに語り続ける元乗組員がいる。東京でクリーニング業を営むわたら「語り部」として各地を巡る大石又七さん(72)に、北朝鮮の核実験についての思いなどを聞いた。
(鶴飼真)



「今の日本人は核の怖さをどれだけ知っているのだろうか」と語る大石又七さん（東京都大田区で）

「核が平和守る」は間違い

水爆実験に遭遇した時のことは覚えてますか。部分的にだが鮮明に覚えています。朝早く、黄色い光が船室にサーッと流れ込んだ。あつという間に、空と海が夕焼け色に包まれた。しばらくして、「ゴ、ドドド」という地鳴りの音がして、下から突き上げてくる振動があった。1時間半ほどして、みぞれのように空から白い灰が降ってきた。全員が甲板ではえ

縄を揚げる作業を続け、頭や顔などに灰をかぶり続けた。核実験のことも放射能も何も知らない時代で、「何が起こったのか」と不思議で、不安だった。被曝の影響は、体などにどう出ましたか。入院1年2カ月目で、肝臓がその日夕方から、めまい、吐き気、頭痛、下痢などで苦しんだ。翌日には、灰があたった所が火ぶくれになった。1週間後、痛みもなく髪が抜けるようになった。白血球も減った。死を覚悟した。

この事件は翌55年、米国が見舞金・慰謝料200万円を支払うことで政治決着した。市民に広がりはじめた反核運動はすば

— 今後、危機を避けて核兵器をなくしていくために大事なことは何だと思えますか。私に難しいことはわからないが、解決への道は、平和になることをみんなで話し、考えることではないか。あまり難しく考えないで、欲や意地や見栄に左右されずにみんな考えれば、道は見えてくるように思う。それに一番近い道を示しているのは、日本の平和憲法だと思う。それと、一般市民が平和への思いを発言していくことも大事だと思う。

おいし・またしち 1934年、静岡県生まれ。48年に漁師になり、53年からマグロ漁船第五福竜丸に乗船。54年3月、ビキニ環礁の米国の水爆実験で被曝。急性放射能症を患って1年2カ月の入院生活の後、東京でクリーニング業を営む。約20年前から第五福竜丸事件の語り部として、体験を小中学生らに話し始める。著書に『ビキニ事件の真実』(みすず書房)など。

核開発を続け、フランス、中国、インドなど核保有国は広がり、数も増えた。米国は核に頼って力で相手をつぶそうとするが、うまくいかないでしょう。自国が持っている、相手に「持つな」と言うのは通らない理屈。核兵器がある限り、どこかに流れていくでしょう。今回、北朝鮮による保有の危機も迎えた。「そのまたことか」という思いだ。ロバート・マクナマラ元米国国防長官も言っていたが、

人間は人類を滅亡させる力を持つ核兵器を持ってしまった。核兵器をなくさないと、本当の平和は訪れないと思う。北朝鮮が核実験をしたことをどう受け止めますか。非常に怖い。核を持って対抗しているという北朝鮮が間違っていることは、わかっている。ただ、周りが北朝鮮を追い詰めていく状況は怖い。(北朝鮮が)常識で考えられなくなる恐れがある。日本が開戦したときの状況に似ている。隣国の日本が追い詰めていくのはどうかと思う。歴史を振り返れば、朝鮮半島には文化面などいろいろな恩恵を受けている。本来、仲良くすべき隣国なのだから、こういうときは助け舟を出す方法を考えてほしい。

本の紹介

『被爆者はなぜ』

原爆症認定を求め

るか』

伊藤直子、田部知江子、中川重徳 著

岩波書店刊

原爆症認定集団訴訟の原告数は二一都道府県二〇〇人になりました(一〇月末)。「被爆者はなぜ原爆症認定を求めるか」——原爆投下から六一年の苦しみの中で、集団訴訟にかける原告の思いはなにか。訴訟は何を目的にしているか。そのような問いかけに本ブックレットが被爆者の声として語り伝えるのは、被爆から六〇年に及ぶ被爆者の生

活体験から引き出される、被爆者の「この病気が原爆と関係ないといわせない」という強い思いです。

原爆認定集団訴訟は、大阪地裁、広島地裁と原告勝訴を重ねています。しかし、被告・国は控訴を繰返しています。日本被団協や訴訟弁護団、支援する会では「勝訴判決を梃子に原爆症認定制度と被爆者援護対策の一括解決を求めて」政府や国会への働きかけを強めています。

本書には、裁判の中で原告と原告側証人の口頭弁論が、原爆被害の非人道性な実態、放射線被害の継続と後遺の立証が、被爆者の生活体験・証言を通してわかりやすく解説されています。

原告は高齢です。判決を聞くことなく亡くなる原告がでるといふきびしい裁判です。核廃絶の実現を視野に、被爆者が掲げる人間回復の願いに、国は真摯に早く応える責任があるのです。

筆者の伊藤さんは日本被団協事務局・相談員、田部さん、中川さんは訴訟弁護団メンバーです。筆致はあたたか

く被爆者への共感が伝わりま

す。(岩波ブックレットA5版六四頁、四八〇円+税)

『市民講座……』

いまに問う

ヒバクシャと戦後

補償』

高橋博子、竹峰誠一郎責任編集

凱風社刊

被爆者認定訴訟は、被爆者の

疾病を、被爆者の病気の状態や被爆後の生活体験などを勘案することなく、恣意的な数値を基にその基準に合わないものを「却下」するという行政的判断を、被爆者個々の生きた現実の位置に引き戻して、その判断を迫るものです。裁判はまた、原爆投下の国際法違反と関連して、国の戦争責任を問うものでもありません。

『いまに問うヒバクシャと戦後補償』は、被爆者の原爆症認定訴訟の問題も含めて、「被爆・廃船六〇年を超えたいま」、ヒロシマ・ナガサキ、



東京大空襲、重慶爆撃、ウラン兵器、ビキニ被災、チェルノブイリ原発事故、核燃料再処理などの戦争被害と核兵器開発被害の現実を「グローバル」に捉え問題提起した論文、シンポジウムの記録などを収録したものです。

おもな収録テーマ・筆者は次のとおりです。

・二一世紀における平和秩序の構築を求めて 木村朗・シンポジウム未決の戦後補償 原爆症認定訴訟 田中熙巳、東京大空襲 星野ひろし、重慶爆撃 前田哲男ほか・原爆症認定訴訟が問いかけるもの 澤田昭二、ビキニとヒロシマ・ナガサキをつなぐ 竹峰誠一郎、ニュークリア・レイシズム 豊崎博光、チェルノブイリ原発事故二〇年 今中哲二、放射能の脅威は我らが生活の周辺に迫る 鎌中ひとみ、ヒロシマからウラン兵器禁止を訴える 振津かつ

み、隠されたヒロシマ・ナガサキの実相 高橋博子など。本書に提起されたテーマを「複合的視点で結び付ける」(编者)のために、本書の論点・視点をいっそう深め総合する「グローバル・ヒバクシャ研究会」のさらなる展開を期待したいと思えます。B6版一六九頁一三〇〇円+税。

絵本『おーいまっしろぶね』の絵画作品が寄贈されました

第五福竜丸の保存運動当時の一九七三年三月に出版された絵本『おーい、まっしろぶね』山口勇子・文の画家・金沢佑光さんから、この本のために描かれた絵画作品一三点を寄贈いただきました。

金沢さんは、『ないた盗ぞく』『てんからおだんご』『ふるやのもり』『あかんぼばあさん』など民話、創作絵本を数多く描かれています。

作品は、機会をみて展示公開いたします。

平和博物館 市民ネットワーク開かれる

平和のための博物館・市民ネットワークの第6回全国交流会が、11月11日、12日に東京・新宿区の早稲田大学文学部教室を会場に開かれました。

交流会は、最初に平和博物館の概括的報告がおこなわれました。山辺昌彦さん（ネットワーク事務局、東京大空襲戦災資料センター）は、被爆60年における全国の平和博物館の戦争を扱った特別展・企画展示について報告。

藤田秀雄さん（社会教育・第五福竜丸平和協会副会長）は、平和博物館の社会教育施設としての重要性をのべ、1999年のオランダ・ハーグ世界市民平和会議でのアピールにおける「平和の文化」を紹介しながら、平和博物館の「研究」「教育」活動を通じて、「平和な世界を創造するための主体形成」の重要性とそのための取り組みの工夫、具体化について提起しました。ここでは、博物館自体が「平和を創る主体形成」の場所、拠点となる可能性の追求や「非暴力行動の日本における育成・発展」の課題について問題提起しました。

安齋育郎さん（立命館大学国際平和ミュージアム館長）は、同館のリニューアルに際して（05年3月）、平和創造と主体形成をテーマにしたコーナーを設置したことを紹介しました。また、世界平和博物館会議を2008年5月に京都と広島で開催する構想があることを報告しました。

各館の取り組み報告では、第五福竜丸展示館から安田和也・協会事務局長が、開館30周年記念事業について紹介しました。

新しい施設のオープンでは、12月初旬に「わだつみのこえ記念館」（東京・文京区）、来年5月「戦争と平和

の資料館・ピースあいち」（名古屋市）の開設が報告されました。交流会には12博物館・資料館、39人が参加しました。

ラトビアから 被曝医療の医師来館

今年はチェルノブイリ原発事故から20年ですが、ラトビアで原発事故処理のために派遣され被曝した作業従事者（ロシア語で「リクビダートル」）の治療にあたる医師のナタリア・クルネさんとヨランタ・シルーレさんの2人が、10月11日に来館しました。

おふたりは、それぞれ広島大学原爆放射線医科学研究所と長崎大学医学部永井隆記念国際ヒバクシャ研究所で、被曝医療について一月余の研修をうけました。

帰国にあたり、受け入れの「エストニア・チェルノブイリ・ヒバクシャ基金」との打合せやラトビアでの被曝者の実情について集会で報告するため上京しました。

同国には、原発事故後6000人が事故処理作業に送られ、被曝地域に1ヶ月から6ヶ月滞在して作業に従事しました。作業者の多くは被曝が原因と思われる病気、精神障害などをかかえているとのことでした。

ふたりは支援の会のメンバーの案内で熱心に展示を見学しました。

外国からの見学者も多数

11月22日には中国平和軍縮協会のヘ・ジュン副会長、チン・ファイファン主任、チャン・リージュン高級研究員ら6名が来館し、ブラボー水爆の説明や廃船になってから展示館建設までの写真パネルに見入っていました。

*

11月23日には、明治学院大学に留学中のアメリカの大学生20人が高原孝生教授の引率で来館し、展示パネルを見て詳しい説明を受けながら館内を時間をかけて見学しました。

見学にあたり川崎会長があいさつし、被曝後の船の歴史と市民の保存運動により展示館が建設されたことを説明しました。また、展示館事務局との打合せのために来館した大石又七さんも被曝当時の模様を語り、学生から多くの質問が寄せられました。とくに、アメリカ政府の補償などの対応、謝罪の有無、乗組員の被曝後の心境と今日の状況について関心があつまりました。

11月26日には立命館大学文学部の春日井ゼミクラスの生徒18人が来館し、学芸員の説明をうけ見学しました。



2007年3・1ビキニ事件記念のつどいのご案内

新たな核拡散など核兵器をめぐる状況を学び、核廃絶へとすすむ道を考えあう市民講座として開きます。

◇2007年2月24日（土）午後2時より4時30分

◇夢の島マリーナ2階会議室（予定）

◇講演 木村 朗（鹿児島大学教授）

テーマ 仮題「原爆投下・核の惨禍から核廃絶へ」

◇参加費 500円